九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

趙毅衡著『苦悩的叙述者 : 中国小説的叙述形式与中国文化』

中里見, 敬
山形大学教養部 : 講師 : 中国語・中国文学

https://hdl.handle.net/2324/7975

出版情報：集刊東洋学. 73, pp.73-80, 1995-05-30. 中国文史哲研究会
バージョン：
権利関係：

(3)
3.2.

一九九五年五月三十日
集刊東洋学　第七三号　別刷

書評

『苦悩的叙述者
——中国小説的叙述形式与中国文化』

趙毅衡著

中里見　敬

『苦悩的叙述者——中国小説的叙述形式与中国文化』

趙毅衡著

中里見　敬

○　はじめに

評者は二年前の拙稿「中国文学研究における物語論」[1]において、中国における物語論の受容がいわゆる視点の問題に偏り、その結果として物語行為の重要性が看過されていること、その原因の一端が部分訳にあること、さらに陳平原『中国小説叙事模式的転変』[2]以外に目立った成果が見られないことなどを指摘した。その後の時の経過は、この分野の研究にとって有利な条件をもたらす一方で、新たな問題を提起しているように思う。中国文学を物語論の観点から論じたものとして、陳平原氏以来の成果といえる趙毅衡氏の著書が刊行されたのを機に、本書の意義を考えることにする。

一　近年の中国における物語論研究の背景

中国における欧米の文学理論書の翻訳は、八八年頃から九〇年代前半に大きく進展した。物語論において最も体系的な著述であるジュネットの *Discours de récit* も、それまでの部分訳ではなく、続編を含む全訳が刊行されたことによって、その理論全体を理解する条件が整った。[3]物語論に限らず、ディコンストラクション、フェミニズム批評から新歴史批評に至るまで、最新の批評理論が場合によっては日本よりすばやく翻訳されるようになってきている。

こうした仕事は西洋文学・思想の研究者によって行われており、中国で出版される外国文学の専門誌を見ると、欧米の研究が盛んに取り入れられつつある状況をうかがい知ることができる。一方、中国の中国文学研究者、すなわち国文学者が、欧米の理論に直接依拠することはまだそれほど多くはないように見える。欧米の理論を中国の作品に適用する試みは、西洋文学や比較文学を専攻する中国の研究者と、欧米に滞在する中国人学者による成果の方が目立つ。

陳平原氏が中国文学の出身であるのに対して、本書の著者趙毅衡氏の専攻はアメリカ文学である。そして、陳氏が物語論からメディア論までを大胆に引用して読者を退屈さ

せなかったのに対して、本書の特に前半はむしろ記述を物語論の内部に限定して、物語論の様々な側面を中国小説に丹念に適用するという緻密な論述を特徴としている。両氏の著述が同じ問題を扱っていながら、むしろ対照的ともいえる印象を与えるのは、両氏の研究基盤の相違に由来すると同時に、中国における物語論研究の成熟を反映しているように思う。

二　語り手から見た、文学の近代／中国の近代

まず、本書の書名となっている「苦悩する語り手」とは何なのか。趙毅衡氏は、文化体系の転換に直面している時代の小説について、次のように述べる。

○作家は新たな潮流をリードする革新派だと自負している。小説の作中人物も斬新なプロットの中での冒険に夢中になっている。ところが、語り手だけは無理に旧来の語りの秩序に従って、物語世界の安定を維持する以外にすべはないのだ。このような小説の中では、新旧の衝突が内容と形式の両面において同時進行している。そのとき語り手は苦悩する。（二頁）

ここで述べられているのは、具体的には伝統的な白話小説から、清末小説を経て、近代小説に至る中国文学の変革の過程における苦悩のことであり、しかもその苦悩は、書き手である作家や物語内容を構成する作中人物ではなくて、仮構の存在にすぎない語り手こそがむしろ一身に背負わされているのだという認識である。伝統中国と近代中国の断絶ないし連続という課題に対して、従来の文学研究は主として作家と作品内容という二つの面を手がかりとしていた。ところが、ここで趙毅衡氏が提起するのは、語り手によって端的に照射される文学の形式――ある内容は様々な形式で書かれうるはずなのに、どうしてある特定の形式によってしか表現されなかったのか――という、物語論によってはじめて明確に浮かび上がってくる問題設定なのである。それは、近代中国が獲得した文章表現（エクリチュール）／文章表現（エクリチュール）によって獲得された近代中国という、言語表現のあり方から中国の伝統と近代を考える問題群とつながっているはずのものである。[4]

このように考えたとき、趙毅衡氏の次の発言も容易に理解することができる。

○批評の目的は、テクストを解釈することでも、テクストの背後に隠された意味を明らかにすることでもない。それは、イデオロギーと歴史の葛藤が作り出したテクストのねじれを明らかにすることなのだ。（五頁）

一九七〇年代前半までの構造主義・記号論的研究の後、ディコンストラクションを経た現在の欧米の文学研究は、文学作品を文学的に解釈することから、むしろ文学を文学たらしめる社会的、文化的、政治的、歴史的、思想的、性差的機構、あるいはそれらの機構を支えるものとしての文学のありよう、といった方向へ関心が移行しているように見受けられる。本書は、物語論という欧米ではもはや古びた道具立てを用いながらも、基本的な姿勢はそうした欧米の研究動向に呼応したものだといえる。その意味で、本書はアメリカ文学と批評理論の研究に従事してきた趙毅衡氏でなくしては書かれえなかったものだといえよう。(5)

しかし、このような趙毅衡氏の立場をどう評価するかについては、様々な見方がありうるだろう。ここでは一点だけ述べることにする。陳平原前掲書と同様に、本書の前半は物語論の方法によって、清末民初を中心とした伝統小説から近代小説への移行という文学史的記述が行われている。我々外国人には到底扱いきれないほどの大量の作品を対象とした、いわゆる［宏観］（［　］は中国語、以下同じ）な記述が本書でも十分成功している。だが、おそらく中国文学研究に対する物語論の最大の貢献がここにあることを認めたうえで、評者は物語論による［微観］分析が欠如している現状を遺憾に思う。

物語論を中国文学に適用すると同時に、中国語という個別言語の実態に密着しながら一般理論の一つである物語論を検証するというたゆまぬ往還的作業を欠いては、西洋の理論の受け売りだという、容易に予想される、しかし皮相な批判を免れないであろう。(6) 欧米文学のみに基づいて文学理論が提出されている状況の中で、一方的な受容にとどまらず、中国文学の立場から一般理論へ貢献することは、我々の課題であると考える。本書で示されたいくつかの重要な指摘は、(7) まさにそのために、掘り下げて展開、検討すべき性質のものだと思う。

大橋洋一氏は「物語論は機能やパターンへの分解と整理だけに終始する、およそ無味乾燥な試みであり、現在、一般に顧みられなくなった」(8) とまで断言しているけれども、我々はまだその程度の作業にも着手していないともいえるのである。

三　物語内容／物語言説の訳語と言語観

中国で物語論を導入する際にまま見られた「視点」や「人称」に関する混乱は、本書において意識的に言及されて、

正確な説明が施されているように思う。[9]

本書の依拠する物語論の理論的基盤は、ブースやチャットマンといったアメリカのものである。フランスの主要な研究は英語訳によって参照されてはいるものの、そのウェートは大きくない。［隠指作者］［叙述干預］［叙述可告靠性］といった術語は、それぞれブースの内在する作者implied author、論評commentary、信頼性reliabilityの訳語である。[10] こうしたブースに代表されるアメリカのナラトロジーの概念がそのまま本書の構成と結び付いているために、日本語訳の整ったフランス系の理論に親しむ機会の多い日本の読者が多少の違和感を抱くことはやむをえない。

ここでは物語内容／物語言説の訳語の問題に限って、評者の意見を述べることにする。今かりにジュネットの用語に従えば、histoire／récit の区別に相当する術語が、研究者によってまちまちに用いられ混乱している現状が本書三四頁で取り上げられている。そのうえで、趙毅衡氏は［底本］pre-narrated text／［述本］narrated text という独自の新たな用語を提唱している。[11]

ここでの議論は、単なる用語の問題ではなくて、言語表象をめぐる立場の違いに由来しているように思う。趙毅衡氏によれば、［底本］とは「自然な時空に存在する一連の事件の流れであって、そこに含まれる個々の出来事の総量は測定不能であり、言語によって表現しえないもの」だとされる。続いて「もちろんその（［底本］の）存在は、物語行為に依拠する。［述本］が存在しなければ、［底本］のことなど問題にならない」と釘がさされている。にもかかわらず、この［底本］という術語は、言語に先立って存在する事実、あるいは言語と切り離して存在しうる出来事を指し示すという印象が強い。ところが、ジュネットのいう物語内容／物語言説の区別は、ソシュールのシニフィエ／シニフィアンに対応し、ちょうど紙の表裏のように、意味するものとしての物語言説と、意味されるものとしての物語内容は分離不可能なものなのであり、一方が他方に先立って存在するという性質のものではない。

趙毅衡氏はこの部分で、シニフィエ／シニフィアンではなくて、ラング／パロールの概念を用いて論じている。評者なりに敷衍すれば、例えば三国志の史実というラングに対して、小説『三国志演義』の各種の版本や様々な形態の演劇・講唱文芸はパロールにあたるのであろう。しかし、今世紀における言語観の転回は、言語を道具と見なす見方を否定し、それにともなって言語化される以前の事物の確

かな存在を消滅させたのではなかったか。(補注1) それゆえテクストは、もはや単に［底本］を祖述する［述本］ではありえないと考えるのである。こうした関係は、実はソシュールのラング／パロールという考え方そのものにほかならない。(12)

シニフィアン／シニフィエを応用するにせよ、ラング／パロールを応用するにせよ、言語表現に先立って出来事の存在を認めてしまう言語観は、文学研究にとって正当なものとは思われない。なぜなら、前節で述べた課題に即していえば、社会的・歴史的にすでに実現した近代を言語・文学がどのように表現したかではなくて、言語・文学によってどのように近代が獲得され、実現されたかを追究することこそが、我々に課された問題であると考えるからである。

四　中国小説史への新たな時期区分

本書では、中国小説史研究に対して重要な概念提起がなされている。従来の文学史では、宋代に講談を語った説話人の底本が話本で、後に文人がその形式を模倣して創作したのが擬話本だとされている。(13) これに対して趙毅衡氏は、白話小説史を［改写期］と［創作期］とに時期区分している。

［改写期］とは、受け継がれてきた物語内容に対して、出版のたびに編輯者によってテクストに加工が施される段階で、宋代から明末の世徳堂本『西遊記』や崇禎本『金瓶梅』あたりまでの四世紀間とされる。この過程で、編輯者という書写主体の平均化、小説の形式的特徴の均質化の結果として、語りの形式が定式化されたのであって、決して講唱文芸の直接的反映ではないことを指摘している。そして以後の［創作期］は、すでに確立した語りの定式から自由ではありえなかったのである。［改写期］の特徴は、版本ごとに異なるテクストが出現するという、本来パフォーミング・アートに特有の一回性という性質を残している点である。［創作期］になるとテクストの固定性・反復性が確立し、版本の違いは字句の異同程度に限られる。

従来の話本／擬話本という考え方は、主として短篇の小説に用いられることが多く、長篇に対しては別に講史／章回小説のような異なる範疇の概念で対処しなければならなかった。(14) それに対して、趙毅衡氏の［改写期］／［創作期］という概念は、短篇か長篇かにかかわりなく、また内容を問わず有効なものである。そもそも白話小説の成立は、言語形式と出版形態双方の要因と密接に関連しており、この用語はそうした事情を的確にふまえたものとなっている。

例えば、同じ『金瓶梅』の改訂でも、詞話本から崇禎本への改訂は物語内容の変化をともなう大幅なテクストの［改写］であるのに対して、崇禎本から清初の張竹坡本へは主として字句の異同にとどまるという事実も、［改写期］と［創作期］における改訂の質的違いとしてうまく説明がつく。同様のことは、例えば『三国志演義』と『金瓶梅』のように、本来成立の経緯が大きく異なる作品にも認められる。

話本／擬話本という概念が、講唱文芸と書面文学の性質の違いに対する無理解によって、かえって文学史をゆがめてしまったのに対して、テクスト成立の過程に着目した［改写期］／［創作期］という見方は、小説史研究の実証的基礎概念として広く共有されるべき有効性を備えている。

五　おわりに

物語論によって新たに分析可能になった文学の形式面における諸特徴を、従来の文学史や作家研究などとどのように切り結び、新たな知見へと導いていくかは、理論的進展が一段落した今、切実な課題となっている。

そうした課題を意識した本書の下篇［中国小説的文化学研究］は、個々の指摘には首肯すべき点が少なくないものの、全体として新たな研究の方向を打ち出すところまでは至っていないように思う。評者が期待するのは、上篇で明らかにされた中国小説の形式的諸特徴を、単にそれが中国文化であると短絡的に結論づけることではなくて、外国文学の形式およびその発展の過程とのつぶさな比較検討を通して、どこまでが言語と文学の普遍性に由来する特徴で、どこからが中国固有の展開なのか、そしてそうした展開はいかなる内在的、外在的要因によって決定されるのかを探求することである。〔補注2〕現在はこうした比較研究の材料が、ようやく中国文学の分野で整備されつつある段階で、むしろ本書もその貴重な成果の一つと見なすべきであるのかもしれない。[15] しかし、このような問題は、中国だけでなく他の言語による文学をも視野に入れなくては取り組めないものであり、趙毅衡氏のように自国の文学に精通した外国文学研究者こそ、最適の人材であることは疑いない。

中国文学研究の現在の水準からみて過大とも言うべきこうした期待を読者に抱かせるのは、本書がいわゆる国文学研究とは明らかに一線を画しているからにほかならない。その結果として、著者は後記の中で知音のいない孤独を訴えると同時に、一般理論よりもむしろ中国学への貢献に

よって中国人学者と渡り合おうとする西洋の中国学界を批判している。その批判は日本の我々にも当てはまることを認めないわけにはいくまい。

（中国文学与文化研究叢書、北京十月文芸出版社、一九九四年三月刊、二九三頁、五・五〇元）

注

（1）『集刊東洋学』六九、一九九二。

（2）上海人民出版社、一九八八。

（3）熱拉爾・熱奈特、王文融訳『叙事話語・新叙事話語』（中国社会科学出版社、一九九〇）

（4）こうした観点からは、いわゆる文学作品に限らず、新聞・日記・書簡など多様なエクリチュールが同等に重要な資料となる。しかし、中国における言文一致の過程において、小説の果たした役割は大きく、小説が重要なまとまった資料であることは否定できない。

（5）趙毅衡氏の主要な研究業績としては、中国古典詩のアメリカへの影響を考察した比較文学研究や、ニュー・クリティシズムの中国への紹介などを挙げることができる。

○『遠游的詩神――中国古典詩歌対美国新詩運動的影響』（四川人民出版社、一九八四）

○『新批評――一種独特的形式主義文論』（中国社会科学出版社、一九八六）

○趙毅衡編選『"新批評"文集』（外国文学研究資料叢書、中国社会科学出版社、一九八八）

（6）中国文学に対して物語論を導入するのが遅れ、また現在でも「微観」な分析が少ないのは、時制や人称の形態的標識を欠く中国語の性質と無関係ではあるまい。評者は以下の拙稿で、時間詞と話法の問題を考察した。

○「中国語テクストにおけるディスクール／イストワール――時間の指示子による形式的識別」（『山形大学紀要（人文科学）』十三―一、一九九四）

○「魯迅「傷逝」に至る回想形式の軌跡――独白と自由間接話法を中心に」（『日本中国学会報』四六、一九九四）

（7）例えば、せっかく魯迅「傷逝」における語りの信頼性に言及しながら、その解釈は分かれ、内在する作者も語り手の逸脱をどうにもできなかった、と指摘するにとどまっている（八二頁）。このように放置されることの多い「傷逝」に対して、評者は注6前掲の拙稿で分析を試みた。

（8）レントリッキア、マクローリン編、大橋洋一ほか訳『現代批評理論――22の基本概念』（平凡社、一九九四）七一五頁。

（9）趙毅衡氏には、中国における最も本格的な記号論の理論的専著がある。

○趙毅衡『文学符号学』（文芸新学科建設叢書、中国文聯出版公司、一九九〇）

（10） ブース、米本弘一・服部典之・渡辺克昭訳『フィクションの修辞学』（書肆風の薔薇、一九九一）参照。

（11） ［底本］／［述本］の概念では、ジュネットのいう物語行為 narration が抜け落ちてしまうことは、もう一つの重大な問題である。評者は、注3前掲の王文融氏の翻訳の［故事］histoire／［叙事］récit／［叙述］narration を採用することが適当だと考える。

（12） 言語活動（ラガンジュ）において個々（パロール）の発話が理解されるのは言語体系（ラング）を前提としているからである。と同時に、言語体系（ラング）なるものは個々（パロール）の発話によってしか類推できないものである。ソシュール、小林英夫訳『一般言語学講義』（岩波書店、一九七二）三三頁参照。

（13） 胡士瑩『話本小説概論』（中華書局、一九八〇）三九五頁参照。同様の考え方は、魯迅「中国小説史略」および同時期に執筆された「宋民間之所謂小説及其後来」（『魯迅全集』一、人民文学出版社、一九八一、一四九頁参照）にさかのぼる。

（14） 例えば、胡士瑩『話本小説概論』では、［説話］［話本］［擬話本］の順に論じたうえで、第十六章に［明清説公案］、第十七章に［関於講史］を付け足している。

（15） 趙毅衡氏自身による本書の英語版が一九九五年八月刊行と予告されている。

○Zhao, Henry Y. H., *The Uneasy Narrator: Chinese Fiction from the Traditional to the Modern* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1995)

（補注1） 同様の認識は、例えば、伍曉明「訳後記」（華萊士・馬丁、伍曉明訳『当代叙事学』文芸美学叢書、北京大学出版社、一九九〇、三二四頁）にも表明されている。

（補注2） 日本語をフランス語と対照させたものとして、次の研究がある。

○中山眞彦『物語構造論――『源氏物語』とそのフランス語訳について』（岩波書店、一九九五）

本稿は平成六年度文部省科学研究費奨励研究（A）による研究成果の一部である。